地域日本語教室における１回１トピック型クラスの実践

Introducing “One Topic Per Lesson” Japanese Language Class

樋口尊子（ＮＰＯ東大阪日本語教室）・浦志美奈子(同)・渡辺菜美(同)
HIGUCHI Takako, URASHI Minako, WATANABE Nami
(NPO East Osaka Japanese language class)

要　旨

地域日本語教室でのクラス活動の改善のため，以前の活動にかわる新たな試みとして，１つのテーマをもって日本語の学習をする「１回１トピック型クラス」の実践を行った。その結果，実践前に比べ，①学習者もボランティアも学習目標が明確になる，②互いが「教える教わる」ことができる学びの場になっている，③両者ともに地域の一員としての「居場所」であると感じるなどの利点が見られた。

In order to improve the Japanese language studies for foreigners in Our class, we have tried a new “One Topic Per Lesson” learning system. The results we noticed prior the new learning system and after are : 1) Both students and volunteers develop a clear purpose for learning, 2) The room becomes a place where both can learn from each other, 3) Both can feel their place as part of local resident.

【キーワード】地域日本語教室，クラス活動，オリジナル教材，１回１トピック型クラス

１．はじめに

1-1. 地域日本語教室について

日本国内の各地域に定住する外国人が増加する中，地域住人と外国人との交流を通して相互理解に努めようと様々な取り組みが行われている。地域日本語教室もその取り組みの１つであるが，多くは日本語教育の専門家ではなく，一般市民がボランティアとして活動している場合が多い。今回の実践を行った教室がある大阪府の教育委員会が行った調査結果（2010 年）によると，調査当時には 225 の教室が把握されており，回答のあった 196 教室における外国人学習者への日本語学習を支援する者（以下，ボランティア）は 2,500 名を超えていた。しかしその中で日本語教師有資格者は 12%に過ぎなかった。学習形態については，１対１で学習するペアリング型が 124 教室で最も多く，学習教材としては,『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）の使用が圧倒的に多く 118 教室であった。

こういった地域日本語教室は，日本語教育の専門機関等に所属しない外国人日本語学習者にとって日本語を学習する貴重な場所となっているが，日本での生活者として日本語教室に通う学習者の目標は個々に異なるため，１つの日本語教室内でコースデザインを設定する難しさなどの問題も抱えている。

1-2. 実践を行った団体について

ＮＰＯ東大阪日本語教室は大阪府東大阪市にあり，専門家に業務を委託することもなく，

運営，企画，広報，資金の調達を一般市民が行っている。教室は市内４か所に６教室あり，ボランティア 139 名，日本語を学ぶために教室に通う外国人（以下，学習者）は 延べ 184 名（2012 年度登録者数）である。６教室のうち，５教室では，ペアリング型のクラス活動を行っており，残りの１教室で，１回１トピック型クラスを実施している。ボランティアに対して長期的な研修は行っていないため，一般市民も負担なく活動を始められる。また，開講時期を特に設けておらず，１年中いつでもボランティアを始めることも可能で，学習者のほうも随時参加が可能である。各教室は，曜日や時間を変えて設置しているため，ボランティア，学習者共に複数の教室に通っている場合もある。また，各教室内での学習活動以外に，年に数回の野外交流会や暗誦・弁論大会など，全教室を通じての交流も図っている。

東大阪市の人口は約 50 万人，うち外国人登録者数は約１万６千人（2012 年末現在）で総人口の約３％を占める。技術力の高い中小企業が多数立地する地域柄，中国やベトナム・フィリピン・ブラジル・タイなどからの技能実習生やそこに勤める外国人労働者が多い。

教室の運営費用は，市からの委託金収入，民間団体からの補助とボランティアからの会費，学習者からの登録費（６カ月間で 1,000 円）で賄っている。また，学習者が勤める複数の企業からも賛助会員として協力を得ている。

２．実践に至った経緯

2-1. １回１トピック型クラスに至った経緯

クラス活動を始めた当初（2004 年）は主に『にほんごこんにちは』（財団法人大阪市教育復興公社）を用い，初級レベルのクラスを日本語教育経験者（主に大学での日本語教師主専攻修了者）が行っていた。しかし，学習者は技能実習生が多く，たいていの学習者が入国前に『新日本語の基礎Ⅰ・Ⅱ』（スリーエーネットワーク）を終了しており，日本語初級レベルの学習を必要とする人は少なかった。また，毎週必ず通える人もいなかったため，同団体が発行した『あいうえおで日本語』（財団法人大阪市教育復興公社）を用いて，当時注目されていた交流型のクラスへ移行した。

2-2. オリジナル教材作成の経緯

移行した当初は，地域日本語教室のために作られた『にほんご宝船』（アスク出版）や『あいうえおで日本語』などを利用したクラス活動を行った。しかし『にほんご宝船』では「女性」を意識しているトピックが多く，若い男性が多いクラスのニーズと合わなかった。また，『あいうえおで日本語』は内容は充実しているが，少人数での活動を想定したものであるため，クラス活動ではそのままでの活用が難しかった。また，時間配分などもクラスに合わせる必要があり，テキストの内容を１回で網羅できなかったり，反対にボリュームが足りなかったなどということもあり，既存のテキストそのままの利用は，クラス活動には適さないという結論に至った。

他のテキストでもその地域でしか使えないもの，話題が古くなり使えないものがあり，トピックについても，毎週違う内容で行おうとすると，既存のテキストだけでは数も内容もカバーしきれないという問題が生じた。そこで，オリジナル教材の作成を行うこととな

った。

３．実践の概要とデザイン

3-1. 実践の目的

東大阪日本語教室に通う日本語学習者は，仕事や家庭を持っている中で時間を作り，自分の意志で教室に通っている場合が多い。従って，教室で過ごす時間は学習者にとって貴重なものと言える。そんな時間を有効に使うためにも，学習者のニーズにあった内容で，生活に必要な地域の情報や知識なども取り入れたクラス活動を行いたいと考えた。そこで，１回１トピック型のオリジナル教材を作成し，地域生活者である学習者に役立つ学習の場となること，また，継続して参加が出来ない学習者に対してもいつでも気軽に参加可能な教室であることを目指して，今回の実践を行った。

3-2. 参加者

１回１トピック型クラスの参加者は，学習者もボランティアも，市による刊行物，口コミ，ホームページで日本語教室の存在を知ることが多い。また，スタート時期を設けていないため，教室を知ったそのときから教室に参加することができる。以下に，参加者の特徴を述べる。

学習者の多くは，ベトナム，中国を中心としたアジア圏の技能実習生，就労者で 20 代の男性が目立つ。少数だが，日本人の配偶者や就労で来ている外国人の配偶者，留学生も参加している。日本語能力については，簡単な会話ができる程度からネイティブに近い学習者まで幅がある。技能実習生は， 前述のように初級テキストを終えている程度の能力がある。就労者の中には国の高等機関で日本語を学んだ日本語力の高い学習者もおり，近年，就労者が増加の傾向にあるため教室の中で扱う日本語やニーズも変わりつつある。なお，日本語学習の経験もなく，会話もできない人が教室に来た場合は，本クラスの主旨を説明し，他にあるペアリング型のクラス活動を行っている５教室を紹介している。

ボランティアの多くは，市の刊行物に半年に１度掲載する「日本語ボランティア募集」で教室を知り，参加し始める。10 代から 70 代まで幅広い層からの参加者がいるが，特に定年あるいは，子育てが一段落して時間ができた人や，外国生活経験者や，外国語に興味がある人が目立つ。小学校や中学校の元教師も少なくない。しかし，日本語教育に興味がある人や，日本語教育に携わったことのある人はわずかである。シニアが多く，20 代が多い学習者との年齢差は大きい。男女比は，開設当時はほとんど女性であったが，現在は男性の参加者も増えつつある。

ボランティアの中から日本語教育に興味がある人や，日本語教育に携わっている人がコーディネータとして毎週の活動に従事している。自ら希望した人もいれば，先輩コーディネータから誘われ始めた人もいる。コーディネータになるために特別な条件はなく，個人の意志により活動している。現在，主に活動しているコーディネータは，発表者を含む 20～50 代の４名で，週替わりでクラスの進行を務めている。もちろん，非営利団体であるので，ここでの活動は無償，交通費も自己負担である。コーディネータはクラス活動で進行役を務めるが，他のボランティアと対等な立場である。

クラスは日曜日の午前中に行うため，学習者，ボランティアともに毎週必ず参加する人は少ない。ペアを組まないこともあり，予定のない日曜日に気楽に参加できる。そのため，参加者は毎回当日にならないとわからないが，平均して学習者 20 名程度，ボランティア 15 名程度が参加している。ボランティアも学習者も登録者自体は，その倍ほど存在する。自転車で数十分かけて教室に通う人も多く，天候や気候にも左右される。そこで，人数が多くても少なくても行える内容の検討も不可欠となる。

3-3. 実践期間

今回の実践は， 2012 年４月から発表時までで，年間は約 45 回である。

４．コーディネータの役割

コーディネータは，毎週の活動内容の決定とその実践を行う。定期的にミーティングを行い，これから行う内容の相談と担当者を決める。活動内容は，リアルタイムに対応でき，その時の参加者の好みに合うような活動ができるよう，年間通しての予定を立てるのではなく，直前に決めることが多い。

つまり，コーディネータが行うことは，①トピックの決定，②教材の作成，③クラス活動の進行，④その他，イベントの実行や反省会などである。

4-1. トピックの決定

トピック（話題）の決定については，実践を行う前にどんなことを学びたいかについてのアンケートを行い，その結果に基づいて決定していった。「日本について」「日本人の考え方」「日本の習慣」「日本のマナー」「日本の歴史・経済・時事」や「職場におけるマナーや言葉づかい」という回答が大半であった。そこで，そのような内容を中心に毎回のテーマ（主題）を決定していった。

その中で，配慮した点は，目的を持って学習できること，技能に偏りがないことなどである。例えば，習慣をテーマと決めた際，その日のクラス活動での目的は，「知っておくと便利なことばを導入」（日本語の学習として），「日本人から聞く」「自国との違いを話す」（技能の聞くと話す），「お互いの違いを理解する」（学習の目的）といった目標をしっかりと定めておくように留意した。

表　実際に行ったトピックの例

テーマ	トピック
年中行事について	母の日，子どもの日，七夕など
日本の習慣について	行事に関すること，日常生活のマナーや職場のマナーなど
生活に役立つことについて	病気，防災，電車の乗り方など
地域に関すること	ゴミの出し方，災害時の避難場所，救急病院，行楽地の紹介など
その他	日本の歴史，マンガや絵本を用いた活動，オノマトペ， 歌のディクテーションなど

なお，課外活動や料理教室を行う際には，「よくわからないけれど行った」，「何かわからないけど食べた」ではすまないように，事前学習を必ず行うように心がけた。課外活動

の行き先を決めたり，行き先の歴史や風土について知ったり，料理教室の場合には，道具の名前や調理する際に使用することばを学んだり，自分の国の料理の文化について話すなど，ただ行く，ただ作るではなく，ことばと知識を増やすような活動を行った。

4-2. 教材の作成

テーマが決まると，教材の準備に取り掛かる。基本的には，コーディネータの１人が提案するが，内容によっては，全員で案を出し合い，作成する場合もある。既存のテキストを参考にする場合もあるが，ここではオリジナル教材の作成方法について言及する。

オリジナル教材の作成は，活動内容をコーディネータが定期的にミーティングを行い考案し，それぞれの好みや得意分野を中心に振り分けた。テーマに従い，担当者が配布資料を作成した。前述した，アンケート結果から得られたニーズに合ったテーマで「読む・書く・聞く・話す」の４技能に偏りがないように，学習者に合う内容，時間配分などを想定しながら作成した。

配布するオリジナル教材の表記については，できるだけ文字数は少なく，初級後半程度の文型で，語彙は制限なく用いた。学習者がそれぞれに学びと感じたことを記入できるように，余白を設けるなどの配慮を施した。

活動を行う上で，視覚的な補助教材としては，あらかじめインターネットで探したイラストや写真，地域の刊行物，図書館で借りた本を用いた。場合によっては携帯電話で画像を検索するなどの方法もとった。例えば，学習者が「自国の食べ物」をテーマとして話す際は，学習者の国の食べ物が書かれた本を準備した。その本は，簡単な文で書かれ，イラストや写真が多い児童書を用いることが多かった。

防災マップやゴミの分別，自転車のルールについてのリーフレットなど，地域の刊行物は実物を用いて活動を行い，活動後は持ち帰れるようにもした。

4-3. クラス活動の進行

上記の準備が整い，ようやくクラスの実践となる。コーディネータは進行役となり，その日のトピックを進める。詳しい進行は 5-1 に記す。

4-4. その他

前述のアンケート結果から「ビジネスマナー」について知りたい学習者が多くいることが明らかになった。しかし，「ビジネスマナー」についてコーディネータの知識だけでは，学習者が満足できる内容にならないと判断し，外部に講師を依頼することにした。講師は，専門学校等で外国人にビジネスマナーを指導している知人にお願いした。このように，コーディネータの知識にも限界があり，不得意な分野については，専門家の依頼や精通するボランティアからアドバイスをもらうなどの方法もとった。

５．実践方法

5-1. クラス活動の流れ

クラス活動の進行方法は，前述したようにコーディネータが行う。１回の活動時間は 90

分である。トピックやコーディネータによって毎回の進め方は多少異なるが，一例を挙げる。

クラス活動の開始前にボランティアへ連絡事項を伝える時間を設けた。たいていの場合は２分程度である。その中で，今日の活動内容，活動方法，活動で気をつけてほしい点などがあれば伝達した。そのあと，学習者がすでに着席しているテーブルへボランティアが移動した。できるだけ毎回違う学習者と話せるように配慮した。各グループは学習者２，３名とボランティア２，３名を合わせ６名前後になるように配慮しているが，バランスの悪い日もあった。

全体的な流れは，ことばの導入→内容の解説→（練習問題）→問題の解答確認→（発表）である。

図　クラス活動の流れの一例

テーマ【オノマトペ】

コーディネータ	キーになることばを板書（開始前に書いておく）	
	↓	
グループ	意味の確認　15 分（参加者が揃うのを待つ）	
	↓	
コーディネータ	「各国語で動物の鳴き声は」と話題を提供	10 分
	↓	
グループ	（学習者が）各国語で回答	
	↓	
コーディネータ	「オノマトペに関する知識を紹介」→プリント配布	35 分
	↓	
グループ内のペア	プリントの問題に取り組む	
	（プリントにオノマトペを使って短文作成を行う内容がある）	
	↓	
コーディネータ	発表を促す	15 分
	↓	
学習者	短作文を発表する	
	↓	
コーディネータ	まとめ　５分	

まず，学習者によって知っていることばに差があるため，今日の学習のキーとなることばを板書しておき，学習者自身はそれを携帯電話の辞書機能を利用したり，ボランティアから聞いたり，もしくは同母語話者に聞いて確認する。その後，コーディネータと板書したことばの使用方法などをさらに確認し，本題に入る。次に，コーディネータがグループで行うことを提示し，各グループがその活動に取り組む。つまり，コーディネータが話題の提供をし，学習者とボランティアはその話題をもとに話しをする。そのグループで発表

された内容を，次はクラスとして共有するため，各グループで話された内容を聞き，伝え，まとめる。ここまでで，たいてい 20 分程度を要する。コーディネータは前もって用意しておいた教材であるプリントを配布し，次の活動内容を伝える。ここからは，学習者とボランティアが，１対１か１対２でプリントに記された内容の活動を行う。わからないことがあれば，コーディネータに質問することも可能であるし，同じテーブルに座っている人たちと相談することもできる。たいていは最後に発表の場を設けた。

図は，オノマトペをテーマにした学習を例としている。この回は，文型の導入はなく，

①ことばを覚えること（身近にあるが意外と知らない「スプレー」「ゴム」など）

②オノマトペについての知識を得ること（日本人でも個人で違うなど）

③短作文を書くこと

④日本語で描かれた漫画にふれる

というような目的で行った。

他にも，例えば防災マップを利用して，自宅や職場，教室から近い避難場所を探す活動を行ったり，観光地についての資料を一緒に読み内容を把握し，行ってみたいところを話したり，日本の習慣などについてボランティアの話を聞くなど，活動内容はさまざまで，技能も偏らないように留意した。

5-2. クラス活動での留意点

活動を進める中で最も気をつけなければならないことは，学習がコーディネータの意図したものになるよう，コントロールすることである。たいていの場合，プリントを用意し配布するが，そのプリントをコーディネータの指示を聞かず，勝手な解釈でしてしまったり，次の活動を先に終えてしまったりするペアもあり，最終的にその日の学習目標に達しない場合があった。したがって，コーディネータは，クラス活動の進行役として的確に役割を果たさなければならない。また，学習者によって知っていることばが異なるため，その日のトピックの重要なキーワード，使用語彙を理解しているかの確認や，練習問題やグループでの意見交換などがうまく行えているかなど，グループ活動が進められていることの確認も重要である。

６．実践に対する評価

6-1. 学習者の１回１トピック型クラスに対する意識

以上のような実践を続け，実践開始から１年後，このクラス活動を学習者がどのように感じているのか知るため調査を行った。対象者は，実践前から教室に通う学習者を含めた調査当時教室に参加していた 10 名の学習者全員。インタビュー形式で「１回１トピック型クラスに来ている１番の理由」を尋ねた。結果は，①「日本語で話したいから」４名，②「日本語の勉強がしたいから」３名，③「いろいろなことが知りたいから」２名，④「楽しいから」１名であった。②「日本語の勉強がしたい」と答えた３名はいずれもクラスへの参加が１カ月未満であるのに対し，③「いろいろなことが知りたいから」④「楽しいから」と答えたのは，いずれもクラスへの参加が１年以上，また，クラスへの参加率が高い学習者は②「いろいろなことが知りたいから」④「楽しいから」と回答した。④「楽しい

から」と回答した学習者に対し，教室に参加した当時からそのように感じていたかを尋ねると,「教室に参加した当時はただ日本語が勉強したくて来ていたが，ここではいろいろな話ができ，たくさんの人と話すことができるので楽しくなり，現在も続けている」という答えが返ってきた。このことから，1 回 1 トピック型クラスがどのようなものかを理解し，継続しているこの学習者にとっては,「ただの日本語学習に留まらない，多くの知識を得ることができる楽しい教室」になっていることが考察された。

6-2. ボランティアの 1 回 1 トピック型クラスに対する意識

実践開始から 1 年後，1 回 1 トピック型クラスに対する意識の調査を行った。対象者は，実践前から教室に通うボランティアを含めた，調査当時教室に参加していた 8 名のボランティア全員。自由記述形式で「1 回 1 トピック型クラスに来ている 1 番の理由」について回答を求めた。「日本を理解して欲しい」「国際交流の場」「ふれあいを経験する」「楽しい」「役に立ちたい」といったことばがそれぞれのボランティアの回答の中にあった。ボランティアは 1 回 1 トピック型クラスを「日本語以外の知識を提供」することができるクラス活動と感じ，参加することを「楽しい」と感じていることがわかった。また,「1 回 1 トピック型の利点」として,「準備が不要なので気楽に参加できる」「いつも新しい発見がある」「自分について再認識するだけでなく，知識や考えも広がり自己成長できる」「グループで行うことで学習者だけでなくボランティア同士も仲良くなれる」「学習者から教わることも多い」「毎回のクラスで学ぶことが大変多い」という記述も見られた。「教わる」「学べる」「発見がある」というキーワードが多いことから，学習者とボランティアが「教わる・教える」の関係ではなく，互いに学び合っていることを意味すると言えるだろう。

6-3. コーディネータの 1 回 1 トピック型クラスに対する意識

実践開始から 1 年を過ぎた時点で，コーディネータの意識調査を行った。対象者は，発表者を含むコーディネータ 4 名で,「実践前と実践後を比較し，変わった点に注目し利点と考えられること」を自由記述で回答した。4 名の意識はほとんど差がなく，ほぼ共通した認識を持っていた。まとめると以下の通りである。

①□習者について

・1 つのトピックについて詳しく学習することで，深くその知識を得ることができている
・さまざまなトピックで学習者が持っている知識や考えを話すことは貴重な体験である
・多くの日本人と話す機会となり，さまざま日本人の考え方を知ることができている
・地域から習慣，歴史に至るまで多岐にわたるテーマで展開したことで学習者の知識と興味の広がりを感じることがあり，それぞれのテーマから学習者が普段疑問に思っていることを聞くきっかけにもなった

②ボランティアについて

・トピックによっては互いの国や考えについて話すことで，異文化理解につながった
・ボランティアにも正解がわからない，答えを推量するような問題を提示することで，グループ間での助け合いが生まれ，双方に「教える・教わる」の関係も築くことができた

③コーディネータについて

・テキストから離れた活動を行うことで，本来伝えたかった「地域に密着したこと」「オン

タイムな情報」「すぐに生活に役立つこと」を与えられるようになり，地域の風土・文化・四季を感じられる内容に変わったことが魅力に感じられた。特に地域やオンタイムな話を学習者と行い話題が増えてくると，学習者がより身近な同じ地域の一員であることも実感させられた

・絵本や歌を使用した内容では，テキストでは味わえない表現やことばに触れることも多く，学習者にとって新しいことばをたくさん提供できたことが良かった

・１回１トピック型のクラスでは始めにトピックを提示することで学習内容がわかり，またそのトピックの内容を理解することが学習目標となるため，学習者にとってもボランティアにとっても学習目標が明確である

７．まとめ

１回１トピック型クラスの実践を行った結果，上記のとおり以前に比べクラス活動に利点が生まれた。特に，日本語学習に焦点をおかず，日本語で１つのトピックについて活動を行うことで，西口（2008）における「地域日本語支援」ではない「地域日本語活動」を実践できたと言えるだろう。また，１つのトピックを通して，学習者とボランティアが共に考え，助け合い，お互いのことを話すことで,「学習者とボランティアは互いに地域の一員である」という意識が芽生え，野山(2008)が「対話や協働作業を通してお互いの特徴をわかちあうことは，ひいては，住みやすいまちづくりに繋がる」といったように，住みやすいまちづくりになっていることを期待する。

８．実践の問題点

ここまで主に利点を述べたが，この実践に問題がなかったわけではない。やはり，いくつかの問題点をかかえている。もっともクラスを進める際に重要になるのはコーディネータの役割である。教材作成はコーディネータにとって準備にあたる。この準備を怠ると，当日うまくクラス活動を進行させることができない。そのため，毎週の教材作成は負担になってしまうこともあった。学習者が知りたい内容でも，コーディネータに知識がなければ,学習前にその知識について知らなければならず,トピックによっては書籍を読んだり，インターネットで情報を収集したり，１回の準備に大変な時間がかかる。また，それだけの準備をすると，活動中につい得た知識をコーディネータが話しすぎてしまうこともしばしばあった。このように，クラス活動の進行は，トピックに対するコーディネータの知識に大きく関係した。これはボランティアも同じで,知識のあるトピックについては容易で,知識のないトピックは困難であったようだ。

進行中は，コーディネータがボランティアより年齢が低いため，活動を進める中で指示を出すことが容易ではないという点も問題の１つとして挙げられる。ボランティアがこちらの意図する活動内容で進めて行けるかどうかには，コーディネータとボランティアとの信頼関係も必要である。もちろん，毎週参加者が異なるため，その日参加している学習者の日本語能力に配慮することも必要であるし，ボランティアと学習者の人数のバランスが悪いときなど，クラス活動を進めて行くのが難しいことも多かった。

９． 実践研究フォーラムでの意見交換から得られた知見

ポスター発表で多かった質問は，参加者数と運営方法についてであった。この２つは，多くの団体にも共通する問題のようだ。その中で，当団体が他団体より問題を解決できていると思える点は，学習者が多いことである。他団体では「教室の存在を知ってもらうことが難しい」や「教室の近隣に住んでいる学習者しか参加しない」など学習者が少ないという問題を抱えている。当団体では，ホームページや口コミで教室の存在を知り，新しく参加する学習者は１年間を通して多い。また，休日の朝であっても，遠方から多くの学習者が通っている。これは，クラス活動に魅力を感じている，または１回１トピックであるので毎週続けて参加する必要がないため気軽に参加が可能であるからと考えられる。

運営方法に関しては，資金の問題の他に，クラス活動を進めるにあたって，誰がどのように決定していくのかという質問があった。もちろん，私たちに「～しなければならない」というノルマやルールはなく，すべて参加しているボランティアが決定し実行している。ＮＰＯ団体であるからできることも多い。たとえば，利益を必要としないため学習者に安く学習の機会を提供できる。極端にいえば，いつでも活動の内容を変更することも可能である。ただし，それは逆に言えば，誰かから指導され指摘を受けるということがないため，自ら決め，実行し，評価し継続していかなければならないことを意味する。活動をよりよいものにしたい気持ちを持ち続ける必要がある。

クラス活動につては，１回１トピック型クラスでは「日常生活に近い日本語を使うので良い」「正解を求めるのではなく意見や考えを話す質問を用意しているので能力に関係なく答えられるのが良い」「能力の異なる学習者が一緒に学べるのが良い」「ボランティアが方言をクラス内で使用していることが良い」という意見をいただいた。方言については，コーディネータがボランティアに使用の指示や強制をしたことがなかったので，このような意見をいただいたことで，新しい利点の発見となった。

しかしながら，「コーディネータの負担が大きすぎる」という声も聞かれた。確かに，その都度，１回１トピック型の教材を作成することは負担が大きい。そこで，このような活動を他団体でもされているなら，ぜひ教材の共有を行いたい。どの団体でも使えるようなトピックであればウェブ上に公開するなどの方法を検討したい。

今後の課題にしているボランティアのスキルアップについては，「毎回活動後を利用して，活動についてのアドバイスを行う」「まずはボランティアからの話を良く聞く」などのご意見をいただいた。意識的にボランティアからの意見を聞き，できるだけボランティアの負担にならないようなスキルアップ講座などを今後，検討していきたい。

参考文献

(1) 西口光一（2008）「市民による日本語習得支援を考える」『日本語教育』138 号,24-32
(2) 野山広（2008）「多文化共生と地域日本語教育支援」『日本語教育』138 号,4-13
(3) 大阪府教育委員会事務局「地域における識字・日本語学習環境実態調査結果」2010 年 3 月〈http://www.pref.osaka.jp/chikikyoiku/sikijisuisin/kekka-hajimeni.html〉
(4) 東大阪市「人口の動き」2012 年 12 月第 345 号〈http://www.city.higashiosaka.lg.jp/cmsfiles/contents/0000003/3438/jinnkounougoki121201.pdf〉